

後撰和歌集  
上

3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4





後撰和歌集卷第一

去二奇上

えらう二二条のまきさいのこやにそめをぬきあはれち  
きとたやうりて

あふさふのまきぬきあはれちとてまきぬきとてあはれち

去立日よたふ

まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて  
まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて

行能敏

凡内  
新恒

長盛

あふさふのまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて  
まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて

まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて

上人

まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて

まきぬきとてまきぬきとてまきぬきとてまきぬきとて

上人



院傳く

まのよふ人へあられの世にふもなまかいあり  
子日はねとこれぬよりまのよふねにたんま  
かりきととりけしは

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま

後撰

上二

あはれにふまのしきなり我素かこふはまんこふ  
あはれにふま











ちねあわゆるの山をどかあそ

いりせあそゆるの山辺りあそゆる花うへあそゆる時を忘る人そあそ

そ山あそゆる道俗さけあそゆるけあそゆる

山あそゆるいりたんきあそゆるおののさそゆるあそゆるかきあそ

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

うー

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

さそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

信正昭

素性

あそゆる

修智

あそゆる

坂上  
是則

あそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆるあそゆる

あそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆるあそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる

あそゆる



やよいのついでに女にうゝ手あ

女のみふつやゝまる

たりとそおにつるや　たりけふにまゝと　ありまゐる

返

水部子

何處花

後原朝  
右朝臣

人  
イ

卷之五

文道  
高風

よみ亭たてまつるべし

正義句

夏尔  
真风

たいしち

よ美人

系極の二角を而にさくう估まる

すゑに

愚ひなりけ







我々がすゝめをふれおふれいさやと人やおうとふり  
 たひしゝゑとあ

美人

清原  
不亦好

あわら  
まきみ

も留り見れぬを池のまみふを柳花をゆとまづいみふ家  
まのくれよりまくれ花や一足なふにそ

上人

七

九  
龍

上  
古

中

よみ人  
しらべ



歌一しあ

あきなりをわひくもちあきなりをわひて花をみくは

いせ

りこよみとあき朝日のむきとあきすけりる花は雪の  
めておれ花なりきむひりれとあきふとをけさうけ  
まのあきとけささささの枝はけささささ

みさささささ

花のいれわむじなうに月一人あき心のけささささ

いせ

月のあきささささ

わさささささ月と花とあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

みさささささあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

返一

風あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あき



侍りしうし斗ふ

あやうそとふにうかめまうすも花まつまもまよふぬれ

よみ人  
しらん

返

たちよりぬまのうすも城あはれまも乃あうとまれいあうん

源清  
源氏

山さくらをうきと送り侍と

君みよたつねあはれ山はくらあうしと思ひさなん

い勢

とやつるえくろ女めいれうみといふおにすくと系力

友あ地めりとりつうはしき

祢きいてありあ里おはる人あ都に自かをれとみす

よみ人  
しらん

法師はなうむのふありき人やうとにまかりてやとく

く侍りてのちあひし里く侍る人のめとより月と海ハ

いうお花をはたありやといひく侍きれ

みえの吉時山乃さくらをれあまとのとんへうひつ

高子院前合のう

山さくら咲ぬるとれもつねより毛筆はう良言まはさうきり

やうはくらをみ

あう雲やみつるもの城さくら花うふいとるやとにる

侍り  
ゆな

たひしに

我屋敷のまけと雲れまの花さうくも流まれうあ

よみ人  
しらん

花さうまはさるぬおとけ川けさうりふきの山ふ

人のふのこがくをうけま山吹のちうさうたあ

これみよとてつういさ

志のひうねあはれはれま城をさうけう山あま花

侍生斗れ花のさうにみちうかりき

おりつまいたふさけうねあてあうみよ花は花さうり

侍生  
通照

あひしに

水そこのまけあまあけうさうせうけて咲るあ

よみ人  
しらん

やまひのうけ十日はうりにこれあまあけうさう

ちかりわうて侍るあまのまさはるやうり水は

はくうれあまおみあうへるあ







おしんとをまたかきうけおとす又くれおとすにききか  
りされとおしめしきのおすういさあおふも成ぬいさうか

よみ人  
みつね

やまひのつこり

ゆきさきにぬりやまぬたのじとまきうけうけおふ有る  
花あけいけはまのおかきおとすをまきあけうけおし

つゆま  
はみ人

ききうけおとすはひききうけおとすはひききうけおとす  
ききうけおとすはひききうけおとすはひききうけおとす

つゆま

友可

歌一らま

くさうい夏のこねおとすうけおとすうけおとすうけおとす  
卯花乃さけおとすねの月さよみいけおとすうけおとす

よみ人

郭公もおふかおねおとすうけおとすうけおとすうけおとす  
返一

時をうけおとすうけおとすうけおとすうけおとすうけおとす  
のいひうけおとすうけおとすうけおとすうけおとす

うけおとすうけおとすうけおとすうけおとすうけおとす  
おむのうけおとすうけおとすうけおとすうけおとす

白たけりおふかおね乃卯花のうけおとすうけおとすうけおとす  
とれわす月うけおとすうけおとすうけおとすうけおとす







つむとありてそはいけりけし

よみ人  
しらぬ

あしたつづき

仔細

人の心につづき

夏原  
安玉

あはれみし夢みたりひて夏の日は暮るるをみればけし  
うねるもあはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり

あはれみし夢みたりけりけりけりけりけりけり



戸名 三浦 幸次郎

美子

とうくぬ花を地をぬき郭公の衣をぬき世を移りて山に  
 旅をなすつとてしむしとてしむしとてしむしとてしむし  
 友乃をかりて人恋を成とて花をぬき山をぬき世を移り  
 女をかりて人恋を成とて花をぬき山をぬき世を移り  
 年々に花をぬき世を移りて後をわたりしむる

年におもたぬいこゝで後小

停勢

上

杜鰐ひとゑみまゝ夏の夜乃ちまゝかやまゝとならん

おちつくをゆふ支くらにぞ憐れむなき恋もよめる如く  
おもひえり友のそ業よりとて露城命とたのそ憐れのはりなき  
八重むくろ志死やとにそ夏虫の聲より外にお人もなり  
ぞ憐れ乃て思きくかり物をかめおともむ所支せし住へハ  
人のもゝたつらなり

人の心をうつる

夏榮師  
平如居

題一

美人

本夏の九日、木下村の金持、片見蔵

返

上十五







惟良の侍子れあひてか合り

侍子を思ふよきそふ成ぬる秋風日るむいふひり

よみ人

歌一しす

おつゝ来にのそあふも本葉ちる秋れもめ残るあそふい  
おおもひひるは秋風日るむいふひり

ふれめあふそつれは秋風のそふよりいぬ我身うあふそ  
あふひるはりけあそふ

いふそ物思ふあふのそあふ秋れも告る風のわひも  
歌一しす

秋風のうちあふそむあふあふいそふにんあわひりりきる  
あふひるはりけあそふ

女のもあふよりあふ月をりいひそそそくはる  
秋れもあふそ秋風のそあふぬい人のそあふそあふれり

返一

秋れもあふそ秋風のそあふぬい人のそあふそあふれり

土平業  
平能屋

深井物思ふ時ふりあふひきると秋平あむ月り

あふ思ひりけあふぬるの目れきう平はうきくそそ  
あふいひりけあふぬる

あふ思ひりけあふぬるの目れきう平はうきくそそ  
歌一しす

閑院

そのはわらんあふもあふあふぬるあふあふあふあふ  
七月七日にゆあふそあふそあふそあふそあふそあふそ

よみ人

あふりて水戸はりきるそ大川あふひきるとあふひんそあふ  
歌一しす

深中四

水戸はりあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

よみ人

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

よみ人



ひこやせもあやかり床交ひ打ちうつそそをさるるうりたり  
かぬう人のゆきより返すにこそひわんとといひおきて  
けりきり

よみか

傳子孝水口

あひてあふと思ふたふはめりふあふし  
返一

返

たぐひな物といふに成ぬ一交七夕の情を人めめする事  
歌一長安

歌一長安

天川ありぬき亭恋むうくそそあ家河をぬとおめお瀬小をそそん  
むりううたぬきあからう所良を候のとけは境黒いたつ板のそ  
殊のよきところきこなくそそ乃あつとそひひぬほもにうあん  
ちきうきんとの家今んううてんとうはさうによりぬる物を

七日の日に戦後病人よりなる者

あふ事此あふひる所い七々うかうや志免ん恋いゆさうて

たぬる日

七々々天のとわゑふあよひさゝをちりそく人乃つれあうらん

藏原教  
太師臣

上卷人

七文とよめ

わ戸井にせせきせわりのあきれを君の船出をとりしをすそ  
て大乃糸を思ふにあらはせちわつ條の七日志きふそとまつ  
糸よりや天のうらのはおせなんどこ井とのあきたはたりを  
天のなれてうあふれこの涙あるう一條のしづ  
と川せそ白ふたりきれとせわりのぬまつる  
林井ににきりわさ天川のうらみんはこころ具おや  
わいの川にひきし潮をせはりぬる渾身あふ袖いぬま  
七夕はせしにきりわ戸の川おそきわりのいさみられたま  
林のぬれをわかれと七夕をたてぬまに丁持思ふ屋あり

まの  
とも  
よみ  
しらべ

七月八日北あり

たれいとのちをわくは天のかをふねもりふねはる多きなん

急補  
輕後

おふーころと

わさ戸出となりぬやふそ七夕のわりぬ別の雲我あひは

妙

思子子子子



たいしなま

よみ人

業平  
新島  
よみ人  
一之  
良三  
よみ人  
一之

これまたのみまの家乃うとあそせふ

みちね  
あまね

在大海

卷一百一十五

すゝきイ

小龍居  
風朝居

返  
味  
イ

題志了矣

夏原  
雪文



妹 哥 中

延表時時枯奇りしりきれいおきずつりけお

秋まりれまぬおとけいしうぬ山お母つりぬるみへ坂もさる

花見も出やしそのと妹のあまうりにまひてふい書しつ

寛平時時きれいのめやれお合に

胸ちあくと妹さう代も月やく煙ももけみふり斗ぬ

おあし時時の女はあ合り

かりかりにわらえをまぬねをいしうぬ同くいの花に足す

妹の神代あまうりも女良花もふくたもぬまつてやあお

おまへしむのころ乃あをたれに秋あのもそあひわたりぬ

もれあくとくまにけりもあせんでいの時あまへ

りあま時返すや

八月あまきみしおそにいしうぬあまを妹さういし

時うし

お母りもあま林をわひあ時あれとあまあまうん袖とを思ふ

延表

あま

あま

延表

時製

高子院のたまのめをあれいしあましうぬあまを妹

れをけあれめしうぬあまを妹さういし

白くあまのうるをあまおめしあまのうるをあまのうる

時返す

うぬあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

左胸うぬあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

おあしつりし

おりてみね袖さうぬるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

返す

あ代もあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

又

とあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

返す

今いしあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

あひしうぬあまのうるをあまのうるをあまのうるをあまのうる

延表

あま

あま

あま

あま







宋于 於 人

費之

歌石亭

天智天皇  
宣旨  
天皇  
宣旨

延壽の時、  
くくやき水の

ゆき  
又屋  
おのゝ  
たみね

多々良寺

上卷

煉、あどくよる

つゆ  
やう  
はみ

中  
村  
や  
あ



去歲

八月十六日

長春  
上

月夜

紀醉堂  
於后  
丁卯  
上巳

ふりやう  
よみ人

惟貞の詩に於て乃奇合の字

杖の杖を人ともめくつとて交を以てのねを泣け。

露とよめ糸

清溪

八月十八日

秋風小波を寄せけり月よりとるれよりあはれ月よあはれ

名ん牛の時煉糸ぬしけり 老れいふてまふしけり

抄文

ひとみへりある。

五覽

影

よみ人  
しる人

費之

み川板



秋の種は秋のねんをさへて花の名をさへおひきり  
をみふへてさへあるれねむいさへてさへてさへてさへて

よみ人

女は花白はくろくをさへて花をわらわひくは花かり

すはひのくりあるしはくねつるさへてさへてさへて

あつより花よりさへてさへてさへてさへて

さへてさへて花のさへてさへてさへてさへて

さへてさへてさへてさへてさへてさへて

さへてさへてさへてさへてさへてさへて

さへてさへてさへてさへてさへてさへて

さへてさへてさへてさへてさへてさへて

さへてさへてさへてさへてさへてさへて

伊勢

妹前下

歌一

秋風あわいさへてさへてさへてさへて

よみ人

花はさへてさへてさへてさへてさへて

よみ人

秋風あわいさへてさへてさへてさへて

よみ人

秋の種は秋のねんをさへて花の名をさへ

よみ人

女は花白はくろくをさへて花をわらわひ

よみ人

すはひのくりあるしはくねつるさへてさへ

後橋



歌一らす

秋風ぬけられし朝ぐりかねわかれ人のやと成りたる人  
たきまけとなくかりかねそ我君のお花うすくさるうとにけり  
けりけりあまかりを振たれやける妹くはにありーとけり  
妹くはにくれとくはにれぬと誓ふあてにかりとのをなく  
ひささうにけりかめいなくあわれさうりとのを惜むらん  
人のかりいきに成るとりかたきまて

けりけりあまかりを振たれやける妹くはにありーとけり  
妹くはにくれとくはにれぬと誓ふあてにかりとのをなく  
ひささうにけりかめいなくあわれさうりとのを惜むらん  
人のかりいきに成るとりかたきまて

よみ人  
しらす

天川よりけりけりあまかりを振たれやける妹くはにありーとけり  
妹くはにくれとくはにれぬと誓ふあてにかりとのをなく  
ひささうにけりかめいなくあわれさうりとのを惜むらん  
人のかりいきに成るとりかたきまて

よみ人  
しらす

歌一らす

心そけりあまかりを振たれやける妹くはにありーとけり  
妹くはにくれとくはにれぬと誓ふあてにかりとのをなく  
ひささうにけりかめいなくあわれさうりとのを惜むらん  
人のかりいきに成るとりかたきまて

あつた  
よみ人  
しらす

よみ人  
しらす

源宗干  
よみ人  
しらす

君とわかれし人の山を林くれしけりけりあまかりを振たれやける妹くはにありーとけり

よみ人  
しらす



影しるま

とてくもはく山もみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

三田山我あ

かゝるもみはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

ま

たいしるま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

三田山我あ

とてくもはく山もみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

影しるま

うも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

かゝるもみはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

ま

ち我これれよえはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

ま

うも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

影しるま

林のちりうも山もみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

かゝるもみはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

影しるま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

影しるま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

あゝうも三田の山はみちいふれはなれはなれはなれはなれ

ま

影しるま

後撰







なり月を夕につく早と云

歟

上人

おとめのねをきいてふれまかりとくしやぬとさきて

後うめくきたりきれい

李氏女

かれはさるおとこのおぼろりたるに

むろの  
美香殿  
のわきま

まみちとやうに思ひてと我女のもゝにつうやうて

源  
のやう

歎くらす

讀

常々をくうてり然つ年々肉付ふけりや一きる

煤中なる物より傳ひてなり此唱後り

傳  
乃  
九  
口

源  
已

氣のまねおかしそ人のいひ傳りまね

讀

此字より吹よりいかにそくとひきと甘く作りきれり

返りにきく花とありてつらやとある

夏果  
古所

返

張

名んまの市と記帳のうとめありまねいませけふ



妹の月光さや年よりみちを此落あけさみへるるわね

つゆあ

歌一うさ

おねにせにつとをねまぬりふねいまゆふも静うさう菊

とみん

かこめ花うつらゆんとしてきけわいとゆふとらあひ

りつらいつたりきれいなふくいつつらいつき歌

みふ人うかれおろしう菊は花あうたあをさぬいさける

歌一うさ

あふ風ふまうするあや妹のよれ月のうよりきあてくらん

のみちれちりつめあ本のをやにへく

お葉もうちあ本ののやにとほりきうるゆい妹の川地あうさ

わすれあきるかくこは紅葉あがりてさくしゆれい

思ひ出さうとあやをあけ妹を川あまのうけりさみさるなるん

あう月のつりこまは日お葉うひお城つさきとこせく

ゆりきれい

う治山ののみち城うんは長月はるけ日城あふうさあは

ちうぬり  
むさめ

九月つもこりり

あう月のの明れ月ありぬうさうねく妹はるるあふ新木

つゆあ

おふーはこもり

いつらにねをたりぬんおふりあねあはり林と思ん

を哥

みりま

歌一うさ

初くまきあれ山道あふ海ゆふのさあうくらあみつらん

つゆあ

さうくこれあうさあはは山あうさああねくうらひ知

妹は月あうさあすみさあああ時あえ冬のけあありさる

あうまはさの月さうああ田あうさあねくうはああをたうねる

ひとりねあ人のさうくに妹あつああうさあ布あ初くこれあ

あう風あはあもこねと冬これひよりねるあの方あさうける

秋果くわうさあああねまはあああさうさううらひよあ

あう月あこれうらひあうさうさうさうさうさうさうさう

あう月あこれうらひあうさうさうさうさうさうさうさう

後撰

上二十九



祇女月一とまどふにふみあひの杜乃木のをいかりにうをぬれ  
 女うつらやまをれ

女りつりてを頼

此乃上卷

[illegible]

返

主み地を以て水意つじまればさうゆへんをかりやとてぬ

歌之石

祚無月が支りとやわおの弘業を氏やむと徑も予くよはきく西家  
ちや若於祚塩山のほろ原業を時返よひあもかわくよりきり  
さくぬあまてきこす弘業にうけていひつらやきれ  
人あまはわれもあはれを幾もてこれいふ本のをめきさうけり

上人  
占

大江古

夏東  
序

增基  
法作

枇杷

五

夫みそはるきれみぢひやうふりもふさふさ  
 歌一良作

歌一良友

冬の池老かもけうの毛をぞく霜は消く物思ふ頃も毛有る事  
おやのほろに戸かりてぞくくろき氷のつらーなる  
かゝれ月老れあふに毛くす目茂君を川やとふふじとくあふ  
老ふけうの毛

人のむすめ  
やつるまう

讀

此を分てゝおやどくらむあそ人のよし業きとふか逢もゆくろ形  
 冬の日むきうにつりやゝもる

冬の月越へにやうき

人忘れぬ君ふと来てわろ袖乃を所をさけ家氷ふれ之に  
歌一と云

歌一以

か交々しあふまなり忘れ白玉を一番音彦と毛人のんたへく  
神吾月とくあつ時をみまうのさうふ節あもつりはめき歌  
々朝の嵐きまむもほのかれ只月のさうねくまり音を降し  
黒髪はあふくならひゆきあわれなまり初雪をあわれと疼み







心わてぢみぞと堪わらぬ白雲のいつまでか花はち散るまいこのいふ  
とは冬といへりにとちこれねえにまさけしやといふもせね  
ど此言す言のふれに我君は松をさめかねといふ人もあ  
そのとき此花をまたなりあるわ一鴨忠うに松ありては事よへね流  
山ちろくめつとせぬく事なゆきけ自くやなん年つよりふい  
松の葉にうれる雪なりそまて丁々冬花散るときの小魚ありき  
ありやまといふても志ごとくならん花もをみちも枝ふたに以  
涙川流なきいうはちにおれと水とけねいゆくかこをあ  
方こそ心に物思ふわらふ必おとるあやつりしてきこぬさうり持  
親あり六月とそらんじ我君は花を一落しあがりつとそ親香  
梅りえみやりとそらんじ霞城まをさめけうち川に死うと疼み  
いつとくと山のさくらもわりとくねりされこまき城まりらん  
ねーありと婦りつむおとる時をあめ白粒ますむと地中家  
年くねとまわ来々に散ねまに花のためーに戸かーとそ  
妻ちろくありとあらゆ支いふく山にねわを風のほろり散る

た今の事  
冬に北は雪も中と云ふつきのきき下にくやん人よあすれ  
むを玉の粉也と申する者の中は月影思はず家なる斗星  
あの月共と云ふまうにもはしに雲いそやなまふそあけ  
関こゆ家道といひぬちうなうとてにさわりて去るま川妻  
みまきとの別あすとてくまういひわう竹うと  
ねわいあして其のちめおす乃つことを思日つらやう  
物思ふとて月日を<sup>のち</sup>あはれまふとて<sup>おも</sup>かきあはれぬとうまく

五哥一

かゝるゝておひきうて竹を数人年つむりありて又  
おひきうて竹を数人

本家のまやれあう山中くぬわひこそちぢわひしうまふ  
 志のひしうまふ人り物さうしうしうしうしうしうしう  
 竹々ぬい戸かりうしうしうしうしうしうしうしう

わろきとあういんさうれいしむとぞわひーきりきれ  
源おきさうやうい竹々城のちーをばうーにたり竹々

後棋

上三十二

卷之六

源宗平

中支



けまゝとぬりけう庵のあまう おもひとをうらみそ  
つら—きね

すふ

まねぬるぬるあま人とみりあふれはきつたなんまの夜は  
あひあうてはあま人のあまう返すうんとくはは

元良の  
みこ

くやま月々くねと今いとてくまらあふのまはは  
返—

あふ  
はう

夕くねねをまねあふのまあ—あまう果ん  
やまあふらひあうてはあま人のあまうつら—き

あま  
はう

あう—あまうい—あまうあまうあまうあまう  
う—

妹の思ひよてあまうけ—あまうあまうあまう  
あまうつら—き

あま  
はう

く—あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

か—あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう

あま  
はう

あまうあまうあまうあまうあまうあまう  
あまうあまうあまうあまうあまうあまう



人こそいふことなりきなりきたひをりしねふあまにこそ流しおろしは  
むさひをわたりしむいり思ふまでにとけぬ人のあひねなりきなり

ほり此際をぬりぬるしにをる川さのふりあちをわたりたりきなりき

あちせをぬりぬるしにをる川さのふりあちをわたりたりきなりき

いりす川さのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

あまのふりあちをぬりぬるしにをる川さのふりあちをぬりぬるしに

けら  
ゆき

かつら  
こゝろ

純の  
めい

平  
文

よみ人  
しる



上三十九



又おひきく傳へぬ

あふみのうととせとわぬふくらむけををうなまよりきん  
女のみよりあをれ華にふえ残つふくそそきく傳  
きれを

大正九年  
の

生れを

おとしのふゆにさけまふそとぞ花やいあゝぬ

返

梅より心を忘るる人なりまづさるる花を有る  
 草堂より心を忘るる人なりまづさるる花を有る  
 里より心を忘るる人なりまづさるる花を有る

二六

里之傳乃

うらつろひるめがとふおれは身になにの強敵のあつてもゆ

古き

返

君代がりあやうきとておはのくに恋ほくのみち我あへぬ  
つゝけりもふ人よりけういゝまはれ

定每

了く明も不人牙付く一尋常

心空より出落者所とて了ふくをつくるもなきてははらん  
題より後

修務

張氏

とをすれい玉にうろ層もはたみ人のあうとるるとうふさ

上人  
占

君ひるふつや

いそはやく不異しとあうち君ひ人のこねまにあうれてたそか。

人をあひしむのちひさしきせう  
せうせうとつらにさう

卷之五

宋子君たのめしよふがこゝに命水あり

号

けやぬ夢路ふまふたのねにいて時を夢を夢と  
 男にやゝあふれふこと成り残さずまゝあゝのまゝに  
 住むの岸はしら浪よるおのれあふのよる目あふ  
 君ふとぬれぬ袖のわらぬ夢おのれのやうに  
 あゝの時にたり物とてうたへばはまゝにぬれぬ  
 世の中を夢とてふの他にも夢を夢とて後にはぬれぬ  
 ちひさのこゝろあふれぬあふれぬのねにぬれぬ  
 君ふよりわらふそつとてむすのねにぬれぬ



ねとこのまゝの女のみねに戸かりてあゝあゝあ  
けりきりくりくつらゝきね

今そゝ家阿のぬ別のお糸月をさね成とひつゝあぬゝゝあゝとぞ

返り  
よおりあねぬとぞきけあやうふあさうふのさねとひつゝん  
つゝかりきあかこさ

たをさの物といふのさねのいゝ成あねぬとぞほろほろとま  
かえり

おとにさねとねあやうふあさうふのさねとひつゝん  
おと人けりきりきり女のおのさねひきねとつゝさあうりね

つらゝきね  
おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん  
返り

こゝろのさねとねあやうふあさうふのさねとひつゝん  
おとこのさねとねあやうふあさうふのさねとひつゝん

とぞ

別といふれゝゝあねぬとぞきけあやうふあさうふのさねとひつゝん  
返り

おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん  
おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん

おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん  
おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん

おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん  
おと人思ひぬ人のねのさねとねあさうふのさねとひつゝん

後撰



悪のこりなきまのなうりきりか川むつまはうつそほき  
女のめとにつらう一まず

わづらうみおあうれんのなうりせいのわ君さうじりせん  
水上平のれりひをう渡川うねくも人をよふあうるか那  
返

いのきるみれれききうらぬまきふまほうお新のうねい  
大箱ふつうい一まき

えあうく傑したる水のせきく渡みきもこけりきあうれ  
歌うらに

月るとれきとれきと毛ぬくんぬ時い事けり新中悪あやあそ  
おとこのおんとてこさう斗れい

山里のまね乃いさる意はさうれあめ人ともまけこ育よう  
うめて女のめとにつらう一けり

ゆく才もあくせられれ山あけいをはりくえおのやゆか  
女斗はうい一けり

おみ人  
うらに  
お大店

人のうけとていはいあうぬう君を悪けりおりもこそをわれ  
う一

つとあういおあうん斗はうらんつまね友人を悪んせせけ  
とんあふつうい一まず

おとれあふつういおあうまねあういなりけりくこれうあ  
れとこのめとにつらう一まず

えうねうおあうん斗はうけをわらういねあうんやそ  
返

後一も後おあうこれとさうかにあやをあて君を悪き  
斗かうにたうに斗あ女の人よりふちきれいつうを

ささめあうあにちうぬるねよういとねをれねのこをやうね  
あ一

住うけううあううせはとてあうをねよう弁のこれ後や  
おれこあうい一まず

中務

源佐明

おみ人  
うらに



うけぬはうふ支事のおやきに給ふに夏のみゆをさう

女のあいにけりけり

ふ浪のともみきしにまよりて給もみし物を住よりけり

男はつらつと

なううてけりぬまておもふのふれあうにいておれん

恋二

女のあにけりけり

くどき思ふおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

わうあうけりおもひをわづらひておれん

まこけりわうおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

くどき思ふおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

源中  
大補

女のあにけりけり

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

はうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

あうけりおもひをわづらひておれん

後撰



おくらつけさすけういし斗あ

最末の  
歌

あゝをれ人のこゝろをふつあけとけあ物とをあるのし斗あ

最末の  
歌

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

平時  
歌

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

おま  
うら

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

批  
た

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

源  
歌

人ふつういし斗あ

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

批  
歌

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩

あゝいしをくけあ女とひきういしをひけういしをひきう

い  
歩



おとや君をもちうきあやめのおきてもねと毛袖のうらぬ

あひまう二平侍を執人のめいよりひきくともあて

いかにあまきいささあやとたわあまきく侍れい

つゝと毛いんとそあふあにとも人やけねるとまうまは

人のめいにあまきくくわうきれとあひくく侍れいお

うたつま侍りぬ

くまねとそねくゆくつゝ毛いれにあらくもあふは

おとこ侍女といせまう平侍を侍りて女といさうあ

といせまねい

わうあといさうそあめをうけれとあらうとみいねと

女のめいよりくねさくねとねとねなんさうらねとい

りきねい

我うひとあきと思ひ田子れ備ふたのん信の教を侍り

いひくくきね女のめいよりあまきくくいさうあめ

れといさうきねい

よみ人

五平侍

のめい

あきせ

くまねいさうそあめをうけれとあらうとみいねと

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

くまねいさうそあめをうけれとあらうとみいねと

足立の山井を侍と毛き通ふ迄ともぬいさうき物

おねつあね平侍のくひつゝくけを侍りていさ

ききねいさうき

大うきなそやわうあのおかかんむりけつり人よあま

かく

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

あまきくくきね女のめいよりあまきくくいさうあ

後撰

あまき



住の元れみみああらぬと歌とりみん我思ふよ勢わるる言

つば

を流りつらな牛馬

見ぬやとあらぬれをあらふのやはるる言わたり可なり

よみ人

戸かりやと流るるつらな牛馬

年ふあふたれぬ物成るる言わたり可なり

中ね

流るる

うはと我ととつらな牛馬ととつらな牛馬

延喜

歌

かうれといゆく才もあ流るる言わたり可なり

延喜

流るる言わたり可なり

延喜

流るる言わたり可なり

延喜

流るる言わたり可なり

延喜

流るる言わたり可なり

延喜

流るる言わたり可なり

延喜

歌

わきのとやのふとさくなんことり思ひもたぬふのねれと

平定文

返

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

蜀士のねをそととさくなんことり思ひもたぬふのねれと

延喜

後撰

上四十二



あゝうらな

管仲

うき世ふも人うらにや淡ちとるけ来りしらぬ意ふまをいん

あゝうらな

管仲

わたりこの座のありういさうぬうかつまでいん治のまそふ

あゝうらな

管仲

つらうとも思ふ世をてぬ涙川あうねく人をあのみむこゝろを

あゝうらな

管仲

なうれてと何ふあむらんふみあうけとねくもあひやへなく

あゝうらな

管仲

何事と今いふまのまんちやあね神もたすきぬわうふへき

あゝうらな

管仲

ふふふ家神もみも我あねぬりしきぬいのれとていぬま

あゝうらな

管仲

女のりやに戸かりたきけふとてまぐくくし傳うれ

うらみくも何うそつうけまがしなまきとめうらに返く思ひ

つ

あゝうらな

あゝうらな

何のえねねあめ地よ新しき波乃かあかりあやねのありう

み

あゝうらな

あゝうらな

思ひんたの世事をあめをなまきとめうらに返く思ひ

つ

あゝうらな

あゝうらな

あゝうらな

わすらまきとめうらに返く思ひ

あゝうらな

ねえいんたのめ人あきありとねくいひこといひうらちのあき

つ

あゝうらな

あゝうらな



「きこころなりやいひたれ」

源清盛  
朝臣

さきもなや戸の隙のありきれいよとふくもあつた  
こゝ女のちと成れれいんといひききあみせさるに  
くらみきる戸のふくころにひたすききいなる  
あれいりくらみきるをふくころにひたすききいなる

よみ人  
しる

ひきいりあひさりける女にひきいりきき

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに  
とれつたねさるに成れいんといひききあみせさるに  
ふくころにひたすききいなる  
あれいりくらみきるをふくころにひたすききいなる  
ひきいりあひさりける女にひきいりきき

源清盛  
朝臣

くくくをききあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに  
とれつたねさるに成れいんといひききあみせさるに  
ふくころにひたすききいなる  
あれいりくらみきるをふくころにひたすききいなる  
ひきいりあひさりける女にひきいりきき

源清盛  
朝臣

つらやうな

今つてふつふの山をれき本を山よりくきいりきき

よみ人  
しる

女のちと成れれいんといひききあみせさるに

かへりききあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

あひひきあひひき成れいんといひききあみせさるに

源清盛  
朝臣

後撰

上四十四



寛平のみりや、市々、おろさせ、食うてのころ、佐十郎の  
めくり、にのこ人を、さあ、ういせ、路くちう、うもめ、うよ、あ  
られ、さう、斗、北、う、但、さ、市、佐、十、郎、み、む、さ、ひ、つ、と、あ、あ、あ  
と、よ、う、い、あ、け、あ、あ、あ、う、う、近、な、れ、と、強、う、あ、あ、その、園、城、は、え、ん  
か、と、この、あ、あ、に、つ、う、う、さ、あ、あ

十八卷

我袖のなまのしを湯の松山より持ちより溪のあゝぬ目の川

とち

月成あられとふむむちうとふ人のありきね  
獨ねのこひもまににおは居つ月成を衣といみそね川

美人

おとこはあきらまふ

からあきか、但最名を立てていりふせよやう今このれ菊き

ちゆく人子のみまひるる一斗

人故く又上より此中より我思ひつくを乃山をみる

たのふ人をとくばりけり

たよりにもおふねのひのお中まいん残さく平はくふへ年架

支

人の心より物見<sup>み</sup>ずいづふくま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>てこ<sup>こ</sup>ろづ<sup>づ</sup>に

是の竹々水のたそけたるひとひり水いつてきき家の  
 ありとまきてつらなり牛馬

人つゝにき流わやぬくが本橋のあやうきと物いふ少く有る

上美人

人と云ひりけくん地もあらはや有きんいのをいさは

しき日ふれいおぼもあらう寸とゆきくけ思ひうけゝる女

めいとうようちかくしゅうくふひてけり

いそてふ心ありて思ふ風ふたふたの心なれは乃上候之候也

ふりけり竹たれといひつらんかともかくつとたふさきふさ

久き水のつるし斗ふ

[illegible]

おとこの女は耕さへりて我返るもせうたふりぬ

又つやゝもる

ふくあて君うたみ、金糸のすりつ、文糸のね、拍みそ有る

男のいひようまできて今なんすゝもの支たをといひ

七竹牛果返子年







土御門天皇 勅撰

新古今和歌集

寸珍形  
全二冊

近日出版

本居春庭著 岡本保孝標註

増補 標註 詞林

小本  
全二冊

清水濱臣増補 加部巖夫校訂

正四位男爵高崎正風序

交際 必携 婦女のし

插画美本  
洋装一冊

文部省檢定係加部巖夫著



